

寒食雨二首其一

寒食の雨 (元豊五年一〇八二 三月)

自我來黃州

我 黃州に來りし自り

已過三寒食

已に三たびの寒食を過せり

年年欲惜春

年々 春を惜まんと欲すれども

春去不容惜

春去つて 惜しむを容れず

今年又苦雨

今年 又た雨に苦しむ

兩月秋蕭瑟

兩月 秋 蕭瑟たり

臥聞海棠花

臥して聞く 海棠の花の

泥汙燕脂雪

泥に燕脂の雪を汚さるるを

暗中偷負去

暗中 偷かに負いて去る

夜半真有力

夜半 真に力有り

何殊病少年

何ぞ殊ならんや 病める少年の

病起頭已白

病より起てば 頭已に白きに

寒食：冬至から数えて一百五日目。清明の前日。この日をはさんで前後三日間火をたかないようにするので、冷えた物ばかり食べることになる。伝説によれば、晋の文公が介子推をよび出そうとして山に火をかけたところ、子推は木を抱いて焼け死んでしまったので、文公はいたく後悔し、その命日に火を禁じたのに始まると言う。梁の宗懐の「荆楚歳時記」に見える。

【通釈】私が黄州に来てから、もう三度めの寒食の日がめぐって来た。毎年逝く春を心ゆくまで楽しみたいと思うのに、春はわたしの気持におかまもなく立ち去って行く。そのうえ今年は降りつづくいやな長雨に、このふた月ほど、秋を思わせるようなうら寒い日ばかりだった。床の中で聞く雨音に、海棠の花の、べにで化粧した雪の肌も、ぬかるみ散っては泥まみれにされてゆくさまが目にもえてくる。「莊子に舟や山を深い谷や湖に隠すということが書いてあるが、私はこの「春」を、私が心ゆくまで楽しめるようになるときまで、どこかへ隠しておきたいものだ。しかしこれもまた莊子が言うとおり」暗闇に紛れてこっそり盗み出し、背負って行ってしまおう、そんな力持ちが真夜中に本当に現れそうだ。「こうしてこの地に、一年一年と春を送っていては」病気にかかった少年が、やつと病床を離れられるようになってみると、すでに白頭の翁であるのと、なんの違いなないことになるのだが……。